

# 「地域のみかた」としての 文化的景観

## —個別解を紡ぎ直す試み—

**はじめに** 景観研究室では、2016年7月30日から31日にかけて、文化的景観研究集会（第8回）「地域のみかたとしての文化的景観」を開催した。

今回の研究集会では初めてテーブルディスカッション形式での実施を試みた。聴講スタイルでなく参加型の形式にも関わらず、全国各地から、行政職員、研究者、コンサルタント、学生、地域おこし協力隊等、文化的景観に関わる様々な立場の110名もの参加を得ることができた。また昨年に続き、ポスターセッションを実施し、18題の応募があった。エクスカーションは、重要文化的景観の選定を目指した取組をおこなっている京都市北区中川北山町を対象とし、約50名が参加した。

本稿では、テーブルディスカッションについて、実施の経緯と意図を述べ、ディスカッションで議論に上がった論点を報告する。あわせて、ポスターセッション、エクスカーションについて紹介する。

**研究集会の狙い** 今回の研究集会では、文化的景観の価値を考える上で地域に対してどのような「見方」をすることが求められるか、文化的景観という概念や文化財制度がどのように地域の「味方」となり得るか、という問題設定のもと、地域に携わる参加者の多様な声をより細やかに汲み取り、地域ごとの取組や理解を共有することで文化的景観という概念の認識の底上げを図ることを目的として、テーブルディスカッションの形式とした。

背景には、景観研究室が取り組んできた「文化的景観学」の歩みがある。2004年の文化財保護法の改正により、文化的景観の制度ができてから12年が経過し、重要文化的景観に選定された地域は51件（2017年3月時点）におよぶ。選定事例が蓄積されつつある一方で、その価値づけ方法や保護・活用方法などのノウハウは地域ごとの事情に依るところが大きく、いわば「個別解」として地域を越えて共有される機会が少なかったのが現状である。そのような経緯もあって、景観研究室が2012年度から主催している『「文化的景観学」検討会』（以下、検討会）では、文化的景観という考え方や仕組みを用いて地域を継続させていく実践を支える基盤を担う「学」の体系化を検討してきた。そして、計19回の検討会を通して積み重

ねてきた議論を整理・再構築し、2016年3月には『地域のみかた 文化的景観学のすすめ』（以下、『地域のみかた』）を刊行し、検討会としての議論を刊行物という形でまとめ、発信した。刊行後、文化的景観に関する学術・行政関係者のみならず、地域づくりなど多方面からの反響を得ることができ、第二版刊行の運びとなった。そのような経緯を踏まえ、今回の研究集会では、検討会を越えて、より幅広い立場で文化的景観に関わる人の、『地域のみかた』に対する忌憚のない反応や意見を直接汲み取る機会を得ると同時に、『地域のみかた』の内容を議論の素材として、地域や立場、学術分野を横断して、文化的景観への理解をより深めつつ、課題や展望を共有することができるのではないかと考えた。

**ディスカッションの流れと論点** 議論を円滑に進行できるよう、あらかじめ参加者を6つのグループに分け、各テーブルで2名の参加者にファシリテーター役を務めていただいた。グループの構成も、行政職員、研究者、コンサルタント、学生など偏りのないように配置した。

議論は以下の4点を話題として提起した。

- ①感想：『地域のみかた』を読んで、地域の「見方」とは、どのようなものと思ったか
- ②気づき：文化的景観という見方をもって、関わっている地域をみたときに気づいたことはあるか
- ③展開：各参加者が関わる地域での取組を踏まえ、より議論すべき視点はあるか
- ④提案：文化的景観という見方を地域の持続的な継承に活かすとしたら、どういうことが考えられるか

上記の話題を発端に各テーブルで議論を交わした後、テーブルごとにまとめた論点を全体に発表・共有し、全体ディスカッションをおこなった。

ディスカッションでは、都市部と農村部の文化的景観を考える際の違いと共通点について意識することと、文化的景観の考え方と地域で暮らしてきた人の意識との違いや、歩み寄る大切さについて議論が交わされた。また、断絶ではなく地域にとって有機的な変化は評価していくことが重要であるという指摘や、新しい地域らしさをつくることも文化的景観においては尊重されるべきだといった意見が上がった。

**ポスターセッション** ポスターセッションは、文化的景観に関する成果発信や情報共有の場を目的として、今

回で2回目の実施となった。研究集会のテーマにかぎらず、また文化的景観に関する制度等の適用の有無を問わない、広義の文化的景観について日頃の調査研究や取組について募集した。発表内容に応じて、学術研究部門、地域活動部門の2つの部門を設け、18題の発表がおこなわれた。国内外の具体的な地域について、大学やゼミの研究発表、コンサルタントによる調査報告、行政職員と地域おこし協力隊による地域づくりの取組など内容も多岐に渡ったが、異なる立場や専門が共同した活動の発表が多くなったことが、ひとつの専門や立場ではなく多様な主体の共同が求められる文化的景観の特質を物語っていただろう。

**エクスカーション** 今回のエクスカーションの対象地である京都市北区中川北山町（以下：中川集落）は、北山杉と呼ばれる磨き丸太や垂木の生産加工をおこなう北山林業の中心地である。集落の中央を南流する清滝川を境に東西に山の迫る急峻な谷の地形により、水田は一枚もなく、山は畑のように細かく分けられ、所有区分ごとに樹齢の異なる北山杉の木立がモザイク状に広がる。清滝川沿いには北山杉を加工し保管するための杉丸太小屋が建ち並び、独特の林業景観となっている。

エクスカーションでは、「中川村おこしの会」の全面的なご協力のなか、地元の林業関係者による解説を交えつつ集落内を歩き、ヘラを用いた杉皮剥きや菩提滝の砂を使った丸太磨きを体験した。また、北山杉の枝打ちの実演や杉を立てたまま乾燥・皮剥きをおこなう本仕込みなど、北山林業の高度な技術も間近に見学し、中川集落の林業景観を堪能する貴重な機会となった。

景観研究室では、2016年度から受託研究として中川集落の調査研究を進めている。北山林業や林業景観もさることながら、中川集落における建造物の特徴や住まい方、谷筋に造成された集落構造の解説、中川における暮らしのあり方に着目し、構成する要素単体ではなく地域総体として「中川らしさ」の価値を見出すことで、地域の文化的景観への取組がその持続的な継承につながるような提案をおこなっていきたいと考えている。

**まとめ** 今回の研究集会は、さまざまな立場から文化的景観に関する実感のこもった手応えや率直な疑問などが共有された意義のある場となった。参加者からは、参加者全員が発言機会を得られた今回のような会を継続的

に開催してほしいとの感想が寄せられた。

奈良文化財研究所に景観研究室が設置されて10年が経つ。今後も文化的景観を議論し共有できる中核的拠点としての役割を果たしていきたい。  
（本間智希）



図31 テーブルディスカッションの様子



図32 ポスターセッションコアタイム



図33 京都市北区中川北山町でのエクスカーション